

第19回 人間・環境学フォーラム 新入生歓迎記念講演会

『この愛しき地球で・・・』

4月7日(月) 16:30-18:00 人間・環境学研究科棟地下大講義室

司会 須田 千里(人間・環境学研究科共生文明学専攻)

藻類の生きざま

宮下英明 准教授(人間・環境学研究科関連環境学専攻) 16:40 — 17:10

ワカメは植物ではない。ワカメは決して下等な植物なのではなく、植物とは全く異なる進化過程を経て、葉のような形をして光合成をして生きようになった生き物である。草木などの陸上植物ですら、元来、光合成生物では無かったものが、光合成能力を獲得して、現在の植物となっているにすぎない。それら光合成生物の進化過程を紐解くと、弱肉強食の競争原理を超越した共存・共生による生物進化の妙がみえる。

私は、藻類の多様性とその多様性をもたらした進化の妙、さらに、藻類を利用した環境技術に興味をもっている。では、藻類とはどんな生物群なのだろうか? 「藻類」とは、「酸素発生型の光合成生物から陸上植物(コケ植物、シダ植物、種子植物)を除いた残りすべて」と定義され、進化の過程で光合成の能力を獲得した生き物の総称である。このため、個々の藻類の祖先をたどると、多くの場合、細菌や浮遊粒子を捕食するアメーバや鞭毛虫だったことがわかる。ここでは、藻類進化の妙、多様性とその生きざまについて触れ、21世紀の課題に対して藻類が果たすべき役割について考える。

「パレスチナ問題」を脱構築する

岡 真理 准教授(人間・環境学研究科共生文明学専攻) 17:15 — 17:45

パレスチナ問題の発生から今年、2008年で60年になります。パレスチナ問題というと一般に、旧約聖書の時代にまで遡る「アラブ人」と「ユダヤ人」の宿命の民族対立、聖地をめぐる「イスラーム」対「ユダヤ」の宗教対立と理解されています。でも、本当にそうなのでしょうか? 異なる価値観に対して不寛容なイメージが強いイスラームですが、実は多元性・多様性こそイスラーム世界の本質でした。アラブ・イスラーム世界では、ユダヤ教徒もアラブ人として、イスラーム教徒やキリスト教徒の隣人たちと共生してきました。むしろ、「パレスチナ問題」を生み出した「他者」排除の論理とは、ヨーロッパの歴史にこそ根ざしたものでした。「パレスチナ問題」とは、「ユダヤ人問題」であり、そして、「ユダヤ人問題」とは、「ヨーロッパ問題」にほかならないのです。「パレスチナ問題」をめぐる「アラブ」対「ユダヤ」、「イスラーム」対「ユダヤ」という虚構の二項対立を脱構築することは、私たちのユーロセントリックな世界観、歴史観を脱構築し、ヨーロッパ的近代を脱構築することにほかなりません。21世紀のグローバルな知のための一つの手がかりとして、パレスチナ問題について考えたいと思います。

主催：人間・環境学フォーラム実施委員会